

書窓

Shoso

No.423

2020.8

太子町立図書館 編集発行

〒671-1561

兵庫県揖保郡太子町鰯

1310 番地 7

Tel (079)277-1580

Fax(079)277-5684

子どもの本だな 81

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

ひとまねこざる

H. A. レイ 文・絵 光吉 夏弥 訳 (岩波書店)

さるのじょーじはともしりたがりやです。動物園を抜け出し、バスの屋根に乗って町を見物。お腹が空いて、レストランの台所で勝手にスパゲティを食べているところをコックさんに見つかりますが、お皿洗いをして許してもらいました。4本の手足を使って器用にお皿を洗うじょーじを見て、コックさんはビルの窓拭きの仕事を紹介してくれました。ある部屋でペンキ塗りをしているのを見つけたじょーじは、ペンキやさんたちがいない間に窓から中へ入り込み、部屋中をジャングルに塗りかえました！怒ったみんなが追いかけてきます。じょーじは非常階段から逃げ出しますが…。

次々と面白いことに気をひかれ、騒動を引き起こすじょーじですが、最後にはうまく収まり、満足できます。親しみやすい絵は、好奇心いっぱいのじょーじの表情や動きを生き生きと描いています。読んでもらえば、4歳くらいから楽しめるでしょう。(池田)

元気なモファットきょうだい

エレナー・エステイス 作 渡辺 茂男 訳 (岩波書店)

モファット家の末っ子ルーファスは待ちに待った1年生になりました。初めて学校に行った日、友だちのヒューイーが教室を抜け出すではありませんか。後を追ったルーファスは貨車の中にいるヒューイーを見つけ連れ戻そうとしますが、ルーファスがどんなにがんばってもヒューイーは帰りがりません。そのうち貨車が動き出し2人は次の駅まで行ってしまいました。2人が駅員のはからいで特別に乗せてもらったのは急行列車の機関室。ヒューイーは機関士になりたいと学校に行くことに決め、ルーファスと教室にもどりました。「はじめて学校へ行く日」

黄色い家でお母さんと暮らす4人兄弟。次々に起こる困ったことを、子どもらしい発想と行動で解決していき、モファット家の明るさと元気よさに楽しくなります。読んでもらえば7、8歳から楽しめます。(西村)

8月	9月	8・9月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
6日	3日	塚森 地域内 10:30~ 10:50	沖代 地域内 11:00~ 11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~ 14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
13日	10日			原池団地 公民館 15:00~ 15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
20日	17日	広坂 公民館 10:30~ 10:50	上太田 公民館 11:00~ 11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

<展示のお知らせ>

野口聡一さん 宇宙へ!



今年、太子町ゆかりの宇宙飛行士、野口聡一さんが3度目の宇宙へ向かう予定です。図書館では、野口聡一さんの著書や、宇宙飛行士・宇宙ロケット・宇宙開発など宇宙に関する本を展示しています。歴史資料館の写真展「特別公開野口さんと宇宙への挑戦」、あすかホール「野口聡一さんパネル展」とあわせて、どうぞご覧ください。

※8月の定例の絵本の時間・おはなしの時間はお休みです。

『パンと野いちご 戦火のセルビア、食物の記憶』 山崎 佳代子 著

勁草書房 307頁 2018年5月刊 3,200円 (請求記号) 596

バルカン半島は中近東と西欧を結ぶ中間地点に位置し、様々な民族が混ざり合って暮らす地域である。そのため、古くから大国の思惑によって紛争が絶えず、この地に生きる人々は政治的な混乱と分裂に巻き込まれてきた。第一次、第二次大戦、ユーゴスラビア内戦、コソボ紛争……バルカン半島の多民族国家ユーゴスラビアでは異なる民族同士が対立し、多くの人々が故郷を追われて逃げ惑った。しかし、そのような状況の中でも生きるためには「食べる」ことが絶対に必要である。人々は戦火の中で何を食べ、どう生きてきたのか。「食の記憶」を頼りに筆者の友人たちが語ってくれた。

クロアチアから逃れ難民となった女性は、NATOの空爆中にズッキーニの肉詰めホワイイトソース和えを作った。なぜこのような状況のときに市場に通い料理をするのか。「料理をすることは、家族が仲良しだという感じを生み出し、こうした状況の中で正常な気持ちを生み出してくれる。それは異常なことが起こっていることに対する抵抗でもある」と彼女は言う。都市部に住んでいたセルビア人男性の話では、戦争が近くなり停電が多くなると、冷凍庫の中身を消費するために町中のいたるところで焼肉大会が始まったという。その中には、時々ではあるが人々の笑い声や歌が聞こえていた。しかし、それが大砲や爆弾の轟きに変わり食べ物や底をつく、建物の周りに生えるイラクサの若葉をスープにして食べたそう。

語り手たちの話に登場するセルビア語の料理の名前の7割ほどは、トルコ、オーストリア、ハンガリー、ドイツなどの外来語である。このことから、バルカンの南スラブの文化は、異なる複数の民族の伝統が豊かに混ざり合っていることがわかる。その伝統料理は、母から娘へ姑から嫁へ、国境や言葉を超えて口承文学のように伝えられてきた。その思いは日本に住む人々にもきつと伝わる、料理を通してそつと折り込まれた悲しみや喜びを遠い国の人々に伝えたいという筆者の気持ちを強く感じた。離れた地で今も人々が幸せであるようにと願わずにはいられない。

(八木)

8月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	×	5	6	7	8
9	10	×	×	13	14	15
16	17	×	19	20	21	22
23	24	×	26	27	28	29
30	31					

9月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
						1
		×	2	3	4	5
6	7	×	9	10	11	12
13	14	×	16	17	18	19
20	21	×	×	×	25	26
27	28	×	30			



- * カレンダーの×印は休館日
- * ■ は館内整理日、返却のみ受付 (10:00~17:00)
- * 開館時間は
10:00~18:00、
金曜日は 20:00 まで開館



地下水

花粉が飛ぶ間だけなら気にもしなかったが、常に必要となると、すぐにゴミになる使い捨てマスクがもったいなくなり、ミシンを出してきてカタカタと数枚縫った。夏はガーゼ生地のものでしのぐつもりだった。

しばらく中止だった、保育園訪問が6月から、図書館での絵本の時間・おはなしの時間も含めてのおはなしと考え、マスクなしでおはなしを語れるよう、透明のデスクマットで仕切りを作り、子どもたちとの間を遮断することに。ところが、保育所ではマスク着用のまま、おはなしを語る。涼しい1枚もののマスクは、息を吸うたびべこつと鼻にくっつき、苦しくなるので、空気の通りがよいガーゼのものを選んだ。がっかりなことに、5、6分歩いて保育所へ行き、そのままおはなしを始めると、冬でもないのにメガネが曇りだした。顔の筋肉が動くたびに、少しずつマスクがずれてくるのも気持ち悪い。短いおはなしでよかった。なんとか、マスクに手を伸ばさずにすんだ。

布マスクでも鼻部分にワイヤーが入っていると固定されるようだ。もうマスク探しはしなくてもいいと安心していったが、そうもいかなかった。ワイヤー入りのマスクを作るか、長時間話してもずれないマスクを探さねば。さて、図書館での仕切り越しのおはなしは、薄暗くした部屋のなか、透明のアクリル板に自分の姿が写りこみ、たった1人の参加者と自分に語っているようでおかしかった。

(竹内)

